Destiny Spiral 外伝集

ロム虫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｄｅｓｔｉｎｙ　Ｓｐｉｒａｌ　外伝集

【Ｎコード】

Ｎ４１４６Ｇ

【作者名】

ロム虫

【あらすじ】

私が書いている小説『ＤｅｓｔｉｎｙＳｐｉｒａｌ』の外伝集となっております。本編を読んでいない方には非推奨な内容となっておりますことをご了承ください。

戦う乙女たちの武勇伝　その一

戦う乙女たちの武勇伝　その一

桜子はギターをリビングまで持ち出してきて、二人の友人のために弾いていた。刹那はそれを聴きつつクッキーを作っており、チャオはＢＧＭのもとで読書に耽っていた。頻繁に訪れる日曜という休日の中の、何気ない光景である。ある種の美しささえも感じられる。

だが、それをぶち壊さんとするアホがいた。

「桜子ぉーっ、助けてくれィ！」

妙なノリの五木が部屋に侵入してくる。丁寧に紡がれていた音が、皿にクッキーを盛りつけようとしていた手が、文字を追う眼が止まる。

「……どなたですか？」

見知らぬ乱入者に驚きつつも、刹那は何とかその言葉を口にする。

「坂咲五木。俺のクラスの友達だ。一応」

「おいおい、一応って失礼じゃん！　それでも隣の席の子か、お前は！」

「隣の席にそんなノルマがあるとは知らなかったな、俺は」

桜子はそう言いながら自分の手にしているギターをソファに立てかける。

「で、助けてくれ、ってのは？」

仕方なく話を進める桜子。チャオと音々は深刻そうに話を聞こうとするが、残念ながらその必要はない。何しろ、相手は五木。その口からどんな問題発言が飛び出すかなど、この世の誰にも予測は不可能。ただ、それがあまりにもくだらないことが九割以上を占めること以外は。

「先週さあ、ソフト部の部長っぽい人が私の目の前で購買のラストの焼きそばパンを買いやがったんだよ」
くだらないにも程がある。
「だから私が『どうせソフト部だから野球なんて大したことないだろうくせして調子のんじゃねー』って言ってやったわけよ」
「お前こそどんな調子の乗り方だ」
「まあ、そしたらキレられて、野球で勝負することになったの」
いろいろと仮定を省略してはいるが、事情は分かる。くだらないことでソフト部の部長を怒らせ、野球で勝負をすることになった。何もかも五木が悪い。
「……で、もしかしてその野球のメンバーに俺たちも入れ、と？」
「お、なかなか察しがいいじゃないか」
分かるわ。それぐらい。
「他のメンバーは？」
不意に、チャオが話に入ってくる。その表情は、妙に楽しそうだった。
「私と小夜、寮長に音々。人数が足りないところは、ルールをむこうが調整してくれるんだって」
「ふうん」
そう呟き、読んでいた本を閉じる。そして桜子と刹那に視線を見遣った後、唇の動きだけでこう言った。
「行くわよ」
それを見た二人は、互いに顔を見合わせる。そして同時にため息を吐く。
こうして、チャオの興味本位により二人は野球に参加することになった。

で、野球場。
「こんにちは、ソフト部キャプテンの小酒井春です」

桜子たち精鋭七人の前に立つのは、どう見ても中学生だった。
「おい、五木」
桜子の殺気を感じたのか、こっそりその場を離れようとしていた五木。しかし、その背中に恐ろしく冷たい声が突き刺さる。
「ごめん下級生が焼きそばパンを私の目の前で奪ったのが許せなかったから」
「悪いな、俺もそれぐらいのことで調子に乗ったお前が許せねえ」
五木の胸倉を掴み、わき腹を小突いて迫る桜子。まあまあと桜子をなだめる刹那とチャオ、桜子に賛同して五木の足に蹴りを入れる小夜。完全に内戦が勃発していた。
「あの、試合を始めませんか？」
「あ、悪いな」
春の呼びかけで戦は終結する。
そして、新たな戦いが始まろうとしていた。

挨拶もそこそこに、五木チームはベンチへ戻ってくる。
「まず俺たちがやるべきことが何か、分かる奴はいるか？」
「トイレ」
「歯磨き」
「ベッドメイキング」
「誰が寝る前の準備をしろっつった！　野球の準備だ！　野球！」
ちなみに、最後の怪しいボケは五木、歯磨きはチャオ、トイレは音々だった。
「そもそも俺たちはオーダーが決まってない」
「よっ、マスター！　いつもの奴」
「俺がポジションと打順は割り振るけど、それでいいか？」
五木以外が頷く。五木は無視されたショックで岩と化す。
今回の野球は人数が足りないので、二塁を使わず、センターとセカンドを省いた形でやることになっている。

桜子はどこからとも無く紙と鉛筆を取り出し、そこに素早くオーダーを書く。

一番…紡木遊衣（レフト）
二番…北条桜子（ピッチャー）
三番…白鷺刹那（キャッチャー）
四番…奈々月音々（ライト）
五番…友河小夜（ショート）
六番…新垣チャオ（ファースト）
七番…坂咲五木（サード）

「こんなもんだな」

外野はとにかく足の速いほうがいい。遊衣と音々は背が高く、足も速そうで、なおかつ運動神経がいいので外野に。桜子は野球経験者なのでピッチャー、その球を取れるのは一番運動能力の高い刹那。小夜は判断力とバランスのいい運動能力がショートにつかえそうで、チャオも意外と運動神経が悪くなく、集中力もあるのでファースト。五木は馬鹿ながらにも柔軟な動きが可能なので、サードだ。

「で、次は作戦だ。今回は内野の守備ががら空きだから、とにかく強く転がせ。そうしたらヒットになる確立は高い。遊衣か俺のどっちかがヒットになれば、刹那なら外野に落として返してくれるだろ。あと、守備の時の外野は前進守備。相手は女子中学生、そんなに飛ばないはずだ。それに加えて、向こうもゴロヒットを狙ってくるだろう。後ろで悠長に構えてたら、一気に三塁まで進まれる」

桜子の作戦、そして解説に、音々以外の一同が驚く。

「……あんた、何でそんなに野球に詳しいの？」

チャオの指摘に内心どきりとする桜子。しかし、よく考えてみれば女子が野球をやっていてもおかしくはない。今まで何気に隠してきた自分を振り返り、急に馬鹿らしくなる。

「俺、小さい頃野球やってたんだ」

「あ、なるほど」
実際に、桜子が思っていたよりもあっさりと話は受け入れられた。
「そんじゃあ、気合入れていくぞ！」
『おー！』
掛け声を上げ、一同はこの時一致団結した。

「い、五木がトイレに行った、だ？」
そして、すぐさま崩壊した。
プレイボール間際、桜子がフィールドを見渡せば五木の姿がない。そこで背後の小夜に声をかけてみれば、「トイレに行きました」という声が返ってくる。
「はい、朝食べた賞味期限切れの焼きそばパンが原因かも、と言っていました」
「あのアホ、どこまで焼きそばパン好きなんだよ！」
「……あの、先輩」
いい感じの声と言葉、タイミングで桜子に声をかけてきたのは、他ならぬ小酒井春だった。
「今回は、向こうに立てている臨時フェンスの向こう側に直接落ちた時だけホームランになります」
どうやら、説明し忘れたルールを説明しに来たらしい。最も、臨時フェンスが設営されている時点で桜子は分かっていたのだが。
「じゃあ、エンツーはどうする？」
「あ、それは普通に三塁までの進塁になります」
「そうか、分かった」
伝えるべきことを伝え終わったのか、春は自分たちのベンチに戻っていった。ちなみに、二人の会話はほかの誰にも理解できていなかった。
やがて五木がこっそり帰ってきて一発桜子に殴られたところで、やっと試合は開始された。

ソフト部の一番バッターは小酒井春だった。
（……足が速いのか？）
春の身長はそれほど高い方ではなく、桜子よりは低い。平均程度の身長だ。身体も比較的細身。パワーヒッターには見えないが、足が速そうでもない。
（あるとすればバットコントロール……それもかなり卓越した）
ネクストバッターボックスには、ソフト部最大の巨体を持つ女子生徒がいる。まるでゴリラのようで、桜子チームの誰よりも体格がいい。間違いなくパワーヒッターだ。
（ランナーを溜める前にあれを持ってくるってことは、かなり自信があるんだな。一、二番だけで得点する自信が）
桜子はそこまで考えると、とうとう投球に入る。足を上げ、スムーズに体重移動する。
（だが――かつて野球部の四番でエースだったこの俺の球をそうやすやすと打てるか！）
まるで弓のようにしなる桜子の身体。その手から、白球は放たれた。そしてまるで女子の投げる球とは思えない速さとノビでキャッチャーミットへと直進する。
ズバァンッ！
快音が野球場に響く。
完璧な設備ゆえに、ここにはスピードガンもある。桜子の球速が測定され、電光掲示板に表示される。
「ひゃ……百六キロ？」
ぼうぜんとする春。それも当然だろう。桜子がはじき出したのは、まるで高校女子硬式野球の投手が投げるような剛速球だからだ。それを、野球部どころかソフト部にも属していない、ただの帰宅部の高校一年生が投げた。加えて、ノビも申し分ない。
「タ、タイム！」
春は慌ててタイムを取る。そしてランニングシューズを直すふりをしながら、桜子のことを考えた。

（なに、この人……凄すぎるよ！）
何を隠そう、春はソフト部キャプテンでありながら、大学の女子硬式野球チームで直々に野球を教わっている、野球少女なのだ。故に、本来はソフトよりも野球が本職なのである。
しかし、その春が手を出せなかった。
初球とはいえ、学年が一つ上とはいえ、現役でない、ほぼ同年齢の女子のたまに手が出なかった。
屈辱だった。
（……でも、所詮はストレート。これぐらいの速さとノビなら、まだ私にも打てる！）
そう思い立ち、春は再びバッターボックスに立つ。日ごろから百キロオーバーのバッティングマシーンで練習をする春にとって、この球速は打てない球ではない。
審判（ソフト部員）の掛け声で、試合が再開される。
桜子の足が持ち上がった。しなやかで美しい動きで、無駄なく体重移動を行う。腕が鞭のようにしなり、完璧なリリースポイントから白球が放たれる。
（――見える！）
春はバットを振った。芯を外しながらも白球を捕らえる。タイミングがずれていたのでファールゾーンに飛んでいったが、それも次で修正すれば充分ヒットゾーンだった。
（いける）
春はそう思った。そして――油断していた。故に、次の桜子の投げた球の異変に気付かなかった。
思い切ってバットを振るう。芯で白球を捕らえる――はずだった。
しかし、ボールは鋭く下方向に落ちる。バットはむなしく空を切る。
ズバンッ！
ボールは見事に、刹那のキャッチャーミットに収まった。
「す……ストライク！　バッターアウト！」

審判のソフト部員も信じられないらしく、その声から力が抜けていた。
（そんな――あんなにキレのいいフォークを投げられるなんて、反則だ）
桜子が投げた球種はフォーク。しかし、ストレートとの球速差が普通よりも小さく、キレも尋常じゃない。加えて、リリースからの球種判断も不可能。
ただの経験者。そういった春の偏見――あるいは油断は、完璧に砕け散った。
（ストレートだけでもすごいのに、あんな変化球をうちの部員が打ち込めるはずがない）
イニング数は六。偶然桜子たちのチームが勝つ可能性を残すための、ソフト部側の配慮だった。
しかし。
その配慮が、今、自分たちを苦しめている。
（私たちが点をとれる確立はかなり低い。それは向こうも同じだろうけど――この桜子って人の力を考えると、サヨナラの可能性だって高い）
もちろん、六回までに自分たちが点を取られ、負けてしまう可能性もある。
なんにせよ、桜子が春たちソフト部チームにとっての最大の敵だった。
――今のところは。

結局、桜子が後続を二人とも三振に討ち取り、攻守が交代する。
桜子チームの一番バッター、遊衣が打席に立った。
遊衣は五木や音々と同じくバスケ部だが、三人の中で一番足が速く、陸上部にも劣らないほどの実力がある。故に、上手い方向に転がれば、それだけでヒットになる確率は充分にある。

ソフト部チームピッチャーは、春。小柄故に、ストレートの速さはたいしたことが無かった。しかし、変化球のキレが良く、球種も恐らく豊富だろう。アンダースローの軟投派のようだ。投球練習ではカーブしか投げていなかったが、その変化量が半端ない。バットが空を切ってまだ余るほどの変化量だった。球速差も大きい。

「……あの感じでいろんな変化球を使われたら、こっちはまともに打てないな」

桜子はネクストバッターボックスで小さく呟く。ちょうど春が投球を始める。初球はストレート。内角低めギリギリに収まる。遊衣は手も出さないまま見過ごしてしまう。

「少しぐらいボールでもいいから振ってけ！　当てたらヒットになる確率がある！」

初心者が春のボールの出し入れを見極めるなど不可能な話だ。ならば、多少ボールでも無理やり転がし、足の速さか守備の穴を突く方法でヒットを狙ったほうがいい。

春はその桜子の言葉を聞き、内心考える。

（やっぱり、あの人はすごい。きちんと分かって指示を出してる）

そう考えると、やはり最大の危険人物は桜子のように思えた。

春の第二球。今度はカーブが胸元をえぐるように入っていき、ストライク。タイミングのずらされた遊衣は、いとも簡単に空振りをしてくれる。

（――幸い、向こうにはまともに野球が出来るのはあの人ぐらいだ）

それに引き換え、ソフト部チームは全員がある程度高いレベルの動きを期待できる。克方法なら、いくらでもあるように思えた。

（私たちは――私は、この人に勝つ！）

春は第三球を投げる。今度は鋭く曲がるスライダー。そのキレについていけず、遊衣は空振り三振をした。

次のバッターは、桜子。

（……この人は危険だ。三塁まで進まれたら、スクイズでもただの内野ゴロでもホームに帰られる）

春はそう考える。桜子を警戒しすぎるがゆえに――今度もまた、油断していた。白鷺刹那という、凶悪なバッターに対して。
敬遠で一塁に出る桜子。その表情は、笑っていた。
「後悔するぜ、あんた」
桜子は春にそう呟きつつ、一塁に進む。
次の打者――白鷺刹那。
（この人も油断ならない。桜子さんの変化球を、なんの苦も無く捕った人だ）
よって、春は本気を出すと決意する。ここで打たれてしまえば、元も子もない。
春の最大の武器は、大きくえぐるように曲がるシンカーだ。その変化の強烈さから、大学野球の人でもそうやすやすとは打てない。白鷺刹那を討ち取るには、これを使うしかない。
そう考えた後、春は投球に入る。初級からシンカー。空振りは確実。奇跡的に当たっても、ぼてぼてのゴロか力のないフライのどちらかだ。
小酒井春は――完璧に油断していた。
白鷺刹那が尋常ではない運動能力の持ち主だということを、知らないのだ。
白球は春の手から放たれる。刹那の眼は、しっかりとそれを捉えていた。
強烈なシンカー。刹那のバットは、その変化を予測したように動いた。
直撃。
完全な芯での打撃。キャッチャーも春も、審判までもが目を見開く。
次の瞬間、ボールは力強く弾き返される。美しい放物線状に飛び上がり、ぐんぐんと伸びていく。
――そして、臨時フェンスを越えてからやっと落下する。
「ほ、ほーむらん？」

あまりにも信じがたい出来事に、春は思わず変な声を漏らしてしまう。
春が呆然としているうちに、桜子はランニングを終えてホームに戻っていた。
「だから言ったろ？　後悔するぜ、って」
桜子の言葉に、春ははっとする。何故、北条桜子がこの白鷺刹那に三番を――本当の野球ならば四番となる位置を任せたのか。それに気付く。
単純な理由だ。経験者で実力もある桜子よりも、確実に打撃力があることが間違いないからに他ならない。
オーダーからセオリーどおりに考えれば、刹那との勝負などもありえなかった。二人を敬遠して満塁にしてでも、後続を討ち取った方が、このチーム相手ならば安全だ。
しかし、そうはしなかった。桜子の投球内容に翻弄され、威圧され、冷静さを欠いていたのだ。
（――二点ぐらい、取り返してやる！）
春はマウンドの上で、そう強く願ったのだった。

桜子チームは四、五番が凡退。二イニング目に突入しても、やはりソフトチームは桜子のストレートとフォーク、そして第二の球種スラーブに翻弄され、三者凡退した。七番を残して攻守交替。桜子チームは六番、新垣チャオの打席だ。
（私の運動能力じゃどう作戦考えたって無駄よね）
とは考えつつも、冷静に戦況を分析する。
（なんだかんだいって、相手も内野の守備は薄い。そこを確実に狙うなら……セーフティバンドね）
チャオは足が速いわけでもないが、まともにバットを振るよりは確率が高い。自分でもそう判断した。
春が投球する。好都合なことに、初球はストレートだった。今の

ところスライダー、カーブ、シンカー、シュートと四球種を見せ付けられているので、チャオにもどの球種でくるか完全な予測は不可能。だが、ストレートならば問題ない。
　チャオは何とかセーフティを決めようとバットを出す。しかし、低く出しすぎてバットの上半分に当たり、小フライとなる。キャッチャーが素早く反応して、これを取った。
「あちゃー、やっちゃった」
　言いながらバッターボックスから帰っていくチャオ。そもそもの目的は自分が参加することよりも、桜子たちがどたばたに巻き込まれるのを見ることなので、大して悔しそうではない。
　続いて、五木の打順。
「うおっしゃあぁぁーっ、ホームラン打つ！」
　不可能だ。
　フィールド上の全員、そしてベンチの仲間全員がそう思った。
　しかし、こんな間抜けな相手にでも手を抜くつもりはない春。様子見のストレートを外角高めに外して投げる。
「おりゃあっ！」
　五木は見事に空振りをする。
「うぅ、うてないよぉ～……」
　涙目で訴え始める。残念なことに誰一人として同情してくれない。当たり前だ。あんなボール球に手を出して打てるわけがない。
「泣くなよ」
「うぷっ！」
　いつの間にかベンチを離れていた小夜が五木の顔面にハリセンを喰らわせる。そしてそれだけをやってから帰っていく。
　ソフト部チームの一同は思った。
　なんだこいつら。
　止まっていた試合も、審判の掛け声で再開する。春はボールゾーンに逃げるスライダーを投げる。
「うりゃあっ！」

偶然当たった！
あまりにもの偶然に、一同が驚く。めちゃくちゃなタイミングとスイングが、見事にボールゾーンで重なってしまったのだ。
センター方向に綺麗に飛んでいくボール。五木はそれに遅れて気付き、慌てて走り出す。外野が素早くボールを捕球したが、すでに五木は一塁を踏んでいた。
「ははははぁ！　ホームランは特別にやめといてやったから感謝するんだなーっ！」
「誰がするか」
一塁コーチャーの小夜。自主的に五木に突っ込みを入れるために入っている。
「ふふふふふ、見てろ、盗塁決めてやりますよ！」
「三塁までどんだけ距離あると思ってんだ、蛆野郎」
「あ、蛆なめんじゃねーぞ小夜坊！」
「……お前の仲間が猫か何かの死体から沸いてきたら、こっそりベッドの中に入れといてやるよ」
「わお、ナイスぷちぷち感！」
そのぷちぷち感、全くナイスではない。
「試合が始まんねぇよ！」
二人ともをひっぱたく桜子。小夜も五木もそのあとはだいぶ静かになる。小声で言い争ってはいたが。
ずいぶん待たされた遊衣の打席は、ショートフライという結果に終わる。
ツーアウトで、バッターは桜子。
本来なら桜子と刹那の二人とは勝負をするべきではない。よって、塁が二つ空いていれば似連続の敬遠で話は終わる。しかし、今回は五木が偶然にも一塁に残っている。遊衣もそのことを意識して、ゲッツーだけは避けていた。よって、桜子か刹那のどちらかとの勝負をしなければならない状況に追い込まれていた。
（――ランナーがいるからには、二連続で敬遠が出来ない。刹那さ

んと桜子さんなら、桜子さんの方がまだ安全だ。ここは勝負しかない）

春は桜子との勝負を決めた。

初球。逃げる方向に鋭いスライダーを決める。外角低めいっぱいに入るスライダーに、桜子は空振りした。

（よし、いける！）

春は手ごたえを掴み、拳を握り締める。

一方。

一塁で五木がなにやら奇怪な動きを見せていた。

まるで鶴の頭のような形に指を集めて手首を曲げ、その形の両手の甲で自分の頭を挟み込むような形になっていた。そして周期的なリズムで外側に手を突き出す。足は蟹股。奇怪と言うよりも、異星人だ。真顔でこの動作をやるあたり、同じ星の同じ生き物とは思えない。

（なにかのサインか？）

桜子は珍しく、五木の行動を真剣に考える。どうしようもないほどの真顔で五木を見た。

五木はそれに答えるように、手を再びぴこぴこ突き出す。

それでも真顔のまま視線を外さない桜子。

手を突き出す五木。

見る。

突く。

「伝わるかッ！」

「分かるかッ！」

一塁コーチャー小夜が五木を蹴り飛ばし、桜子はヘルメットを脱いで投げ飛ばす。両方の直撃を受け、五木は蹲る。

「くっそぉ……とーるいのつもりでサイン出して何が悪いんだ！」

「それをいま口に出すお前が悪いわァ！」

再び小夜の蹴り。

だから、盗塁は無理なんだって。

五木が沈黙し、ふらふらと立ち上がったことから試合は再開される。
（なんか、この人たちけっこうアホですね）
春にさえそう思われ始める。原因は殆ど全て五木だろう。
春の第二球。今度はボールゾーンギリギリにストレート。桜子はそれを見極め、バットを止める。
第三球。外角へのカーブ。桜子は何とかタイミングを合わせ、バットに当てる。しかし、完璧にファールゾーンに飛んでいく。
第四球は再びストレート。内角のボールゾーンに入る。桜子は身を反りつつこれを避け、手は出さない。
（次で、終わりだ！）
春は第五球にシンカーを投げる。ぐいと内角低めに捻り込むように入っていくシンカーに、桜子のバットは空を切った。
正確には、僅かに掠っていた。しかし、キャッチャーがキャッチしているため、空振りと同じ。桜子は討ち取られ、第二イニングが終了した。
「すごいじゃないですか、春先輩」
ベンチへと戻る中、春に声をかけたのは二番ファーストのゴリラ……もとい、郷里蘭子だ。案外声が可愛いところが逆に怖い。
「あのピッチャーの人を討ち取るなんて。最後のシンカーもかなりすごかったですし」
「うん、けど私が打たれたのはあの人じゃないからね」
そう。春のシンカーを完璧に打ったのは刹那だ。桜子は春の打撃を完璧に押さえただけに過ぎない。
「冷静さを欠いていただけ――なんだけど、それが命取りなんだなぁ」
蘭子に言うでもなく、ため息混じりに呟いた春。
次の攻撃で、再び春の打順が回ってくる。

七番バッターは桜子のストレートとスラーブ、第三の球種カーブに翻弄され、三球三振に終わる。ここまでで投げたフォークは、全部で二回だけだった。

（……決め球はあくまで決め球、ってことね）

春はそう考えつつバッターボックスに立つ。

（あのスラーブも脅威だけど、狙えば打てる。カーブの方は狙わなくてもカットぐらいは出来る。ストレートかスラーブ、どちらかに絞って、フォークが来るよりも先に叩く！）

春の読みでは、桜子はフォークを自分と蘭子にしか使わないと考えていた。実際、これまでの二球のフォークは春と蘭子の二人に一球ずつ投げられている。逆に言えば、自分たちは決め球にフォークを使われる可能性が高い。狙い球はかなり絞られる。

しかし、三つの変化球を持ち、ストレートも速く、ノビがある。依然として春でさえヒットを打つのが難しいのは変わりない。

春はバットを構える。そして桜子に集中する。狙い球はストレート。スラーブよりは打ち損じることがないし、桜子もそれなりの自信を持っているだろう。

――しかし、初球は期待や予想を裏切ってフォークだった。

空を切る春のバット。そして、快音を立ててミットに吸い込まれるボール。

（――こ、ここでフォークッ？）

春は悔しさを表情の裏に隠しつつ、次の投球に備えてバットを構えた。

（なんにせよ、二連続でフォークは来ないはず。だったら、今までどおりスラーブかストレートのどちらかに絞ればいいだけ……！）

桜子の第二球が放たれる。ストレート狙いの春は、その球が遅いとすぐに分かる。変化球はカーブだった。タイミングがずれながらも、何とかカットする。

しかし、追い込まれた。

（カーブをカットするのも向こうの計算のうちか……）

まるで自分の心を見透かされたようで腹立たしかったが、すぐに次の球種の可能性を考える。
（カーブは決め球には来ない。最低でも、次に使っても無駄にカットされるだけだ。下手をすればヒットになる。使ってないのはスラーブとストレート。けど、フォークには決め球としての強みがある。……けれど、フォークはボールゾーンに入るような位置には投げられない。見送られたら、決め球を無駄に投げることになる。低めいっぱいに速い球ならストレートの可能性が高い。それ以外の場所ならフォーク、遅ければスラーブか）
春は考えをまとめ、身構える。そして、桜子が第三球を投げた。
低めいっぱいに速い球。確率はストレートが高い。春はストレートのつもりでバットを降り始めた。
――しかし、ボールは鋭く下に落ちる。フォークだった。
必死に合わせようとバットを持っていく春。かろうじてバットには当たったものの、ピッチャー真正面にちょうど捕りやすい具合のゴロが転がる。桜子は無論容易く捕球し、一塁に送る。
ツーアウト。春は力なくバッターボックスから戻っていく。
「先輩」
ゴリラ――じゃなくて蘭子が春に声をかける。
「確立で考える癖、完璧に見破られていましたね」
「うん」
確率的に、桜子はカーブを見せ球に使うはずだった。しかし、二球目でカウントをとる球として使った。初球にフォークの確立が低いと考えているところに、フォークを投げられた。低めのフォークはない、一打席に二球もフォークを投げたりはしないだろう。そう言う確率的思考を裏切り、最後もフォークだった。
カウントを捕るカーブを――確率の低い球を狙っていれば、ヒットは打てていただろう。フォークは難しかったが、それでも空振りするよりは出塁の可能性があった。
（ここで蘭子が敬遠されたら、こっちの攻撃は終わりだ）

しかし、桜子なら――敬遠という手段に出ず、正々堂々と勝負をしてくるかもしれない。
そうすれば、蘭子にも一発の可能性がある。フォークだけに絞っていれば、可能性も無くはない。さっきの投球で二球もフォークを見た。少しはその変化を捉えられるかもしれない。
蘭子が打席に立つ。その巨体の影に刹那が覆われる。
「打ちます」
その圧倒的な発現に反応したのは――何故か五木であった。
「打てるもんならこっちに打って来い！」
「けん制」
桜子はそう呟き、五木へ目掛けてボールを投げる。
「ぐふっ！」
お腹に直撃する。
「……子供がいたらどうするの！」
苦しそうに反論しながらボールを投げ返す五木。
「急に何のキャラだ、それ」
桜子はボールを受け取り、前を向きなおす。
「くっそぉ、いつか小夜の子供孕んだら見返してやる」
いや、小夜は女だから。桜子はそう言うのもめんどくさかったので、仕方なく再びけん制球を投げる。
「ぐふぅんっ！」
お腹へ嫌な感じに直撃する。今度は何の言葉も発さずにボールを投げ返す五木。ふと小夜の方を見れば、顔を真っ赤に染め、石像のように突っ立っていた。
「おい小夜、大丈夫か」
「こども」
「はぁ？」
「こども……」
何かやばいものを感じた桜子は小夜から目を離し、やっと前に向き直る。

長いボケを乗り越えた一球目。低めのストレートだが、蘭子はかなり振り遅れる。
（スラーブかカーブ狙いか？）
続いて二球目。桜子は内角に外れるスラーブを投げた。今度はかなり速いタイミングで振ろうとするが、バットを止める。
さらに続けてスラーブを投げたが、今度はカットしてファールとなった。速い球――ストレートかフォークが狙い球のようだ。
（最初だけはスラーブでカウントを取りにくると思ったか、それともカーブを投げてもらえればラッキー、程度でカーブを待ったか……どちらにしろ、次は速い球狙いだな）
ならば遅い球で決めるのが筋だが――二度続けてスラーブを投げている以上、スラーブは危険だ。同様にカーブは決め球にはならない。
ひとまずボールゾーンに逃げるカーブを見せておく。やはり、タイミング的には速い球を狙っているようだ。
（ここでスラーブを投げてもいいが、遅い球が続いている。速い球を内角のボールゾーンに投げて見せておくか？　でも、そうしたら次はスラーブです、って言うみたいなものだからな……。やっぱりここで決めるか、それとも――）
そこまで考えて、桜子は違う手段を思い至った。
（まてよ、ここで速い球を投げるのは向こうの予測済みだ。けど、それがボールゾーンのストレートだったら話は別だ。速い球を見せ、今度はスラーブで攻めてくる――と、思わせておいてから、決め球のフォークを投げる。よし、これでいこう）
桜子はそう考え、次の投球を開始した。内角高め、外れる範囲のストレート。すこし外れすぎたので、蘭子はこれには反応しなかった。
そして、最後の投球。渾身のフォークを、内角低めに決まるように投げる――が、ここで考えのミスに思い至った。
（やばい――フルカウントの状況であの位置に投げるなんて、フォ

ークしかありえねえ！）
ボールは絶対に出してはいけないので、スラーブとカーブは無い。ストレートも高さが甘いところになるのでありえない。つまり、あの位置に投げるのはフォーク以外にありえないのだ。
案の定――蘭子は桜子のフォークに反応した。まるで最初から待っていたかのように、フォークに狙いを研ぎ澄ませていた。
ボールはバットの芯に吸い込まれるようにして当たった。
蘭子は完全にバットを振りぬく。白球は大きな弧を描き、ホームランは間違いないだろうという飛距離を見せた。
ボールは臨時フェンスを大きく乗り越えた場所に落ちた。
「蘭子ぉぉぉっ！」
ソフト部チーム側のベンチから春の声が上がる。蘭子はそれに答えるように、親指を立てて合図をした。
（完璧に打たれた……ってか、あの見た目で蘭子って名前なんだな）
少しずれた部分でもショックを受けている桜子。蘭子はホームベースを踏み、ベンチで待つ仲間とハイタッチをしているところだった。
続くバッターは抑えられ、三番までで表が終了。次は桜子チームの攻撃だった。

刹那が敬遠され、四、五、六番が凡退する。三イニング目はこうして終了した。続く四イニング目の表も、三者凡退で終了、再び七番が残る。裏に入って五木と遊衣が凡退し、桜子と刹那が敬遠、音々が討ち取られる。四イニング目は完全な沈黙のままに終わる。
そして、五イニング目。
七番が凡退し、ワンアウトで一番の春。
（……ここで私が出ないと、勝ち目はかなり薄い）
この攻撃で春が出塁しなければ、仮に蘭子が出塁したとしても後続がアウトで終わり。次の最終イニングでの攻撃も三人を抑えられ

て終わる。そこで奇跡的にランナーが出ても、まだ七番が残っている。自分に再び回ってくる確立は低い。未だに一点リードされているので、まずはそこを返していかなければならない。

（――ストレートを打つ。ここのところ、スラーブが多めになってきていた。なら、今この時点でそのことを振り返り、速球中心の投球内容になるはず。もし、多少ボールゾーンに入っていても狙うべきだ。この人は、ここにきてフォアボールなんて出さない）

そう考え、春は速球に身構える。

第一球目、内角低めのストレート。狙ってはいたが、ギリギリでファールになる。続く二球目はカーブ。ボールゾーンに逃げる球だったので、春は見過ごした。

第三球。外角高めいっぱいに決まる、フォーク。

（――っ！　なんて球を投げるの、この人は……）

驚きながらも春は冷静だった。次の球種について考える。

（ここでスラーブでも大丈夫かもしれないけど、決め球としてそれは怪しい。ここまで使い込んできた球だから、私だってもう覚えた。それなりの確立でヒットにする自身はある。なら、ここで投げてくるのは二つ。ストレートか、フォークのどちらか）

それでも春は、決め球のフォークよりもストレートを選んだ。ここまで、確立で投球内容の全てを選んできた。確立で全てを選ぶ癖が見破られていると知っていても。なぜなら、それを逆に利用し、桜子を騙すため。ここで本来なら決め球のフォークの方が確立は高い。だから春がフォークを狙う――そう思わせることにより、桜子にストレートを投げさせるのだ。

桜子の第四球。桜子はまず、スラーブを間に挟んだ。内角低めのボールゾーンに潜り込む。春はこれには一切反応しない。

そして、第五球目。桜子が投げた球は速い。ストレートだった。外角高め、ボール気味。

春は無理にでもそれを打ちに行った。次は確実にフォーク。けれど、今まで自分は一度もまともに当てていない。そんな球に賭ける

気などさらさらないのだ。蘭子の一発も、最初からフォークを狙い続けていたからこそのもの。しかも、次も打てるとは限らない。そんな球と比べれば、ボール気味のストレートなど甘いものだった。

芯では捉えたものの、体勢は崩れていた。飛距離は半端なもので、落ちるかどうかは微妙なところだった。

ライト方向に飛ぶ打球。音々が慌てて駆け出す。

「音々、取ってくれ！」

「分かってるわよ！」

音々がボールの落下地点に追いつくかどうか、曖昧なタイミングだ。落下地点に目掛け、音々は跳躍し、滑り込むようにグラブを伸ばす。ボールに手は――届いた。

衝撃に手首が耐え、ボールが零れ落ちることはなかった。

「……そんな」

春は力を失った声で呟く。

（――私たち、この人に……野球人じゃない人に負けるの？）

それはどうしようもない屈辱だった。幼い頃からひたすら野球に努め、学校の女子硬式野球部ではレベルが低く、自分で直接大学の硬式野球部に頼みに行った。練習をさせてくれ、と。休日も返上して、練習とトレーニングに明け暮れる毎日だった。自分の夢――プロの女子野球選手になるという夢を手伝うため、蘭子も一緒に付き合ってくれた。自分に足りない長打力を補うために己を鍛え上げてくれた。

春の脳裏には、様々なことが浮かび上がる。自分と蘭子を迎え入れてくれたソフト部。毎日大学まで練習に行くのは大変だろうから、平日はここで練習しなさい――と、前キャプテンが二人をソフト部に誘った。代わりの条件など、何一つつけなかった。部員の人たちも、みんなそれを理解してくれた。だから、二人は恩返しの代わりにソフト部の試合に出るようになった。

けれど――そんなたくさんの思いを、こんなふざけた連中が壊してしまう。いや、壊されてしまうのだ。桜子と刹那のような、天才

的なプレーヤーばかりのチームならまだ分かる。しかし、その二人への警戒を怠り、二点も失点した自分の弱さが、こんな弱小チームに対する敗北の原因となるのだ。
様々な思いが春の心にのしかかり、押しつぶす。そんな様子を見ながら、蘭子は悲しそうな表情をする。
「……春先輩」
春はゆっくりと、力ない足取りでベンチに帰ってくる。そしてそのまま、全員が沈黙に支配される。誰も言葉を発さないまま、時間だけが過ぎていく。
「――決めました。春先輩。私、『プロテクター』脱ぎます！」
その言葉に、一同がざわつく。「プロテクターって何？」「え、今までそんな負荷のかかるものつけてたの？」など。
しかし、春の反応だけは違っていた。
「でも蘭子、だいじょうぶなの？　だって貴方は――」
「大丈夫です。今だけです。それに――春先輩のためですから」
そう言うと、蘭子は自分の首筋に手を回す。そして髪の毛を掻き分け――チャックを掴んだ。
「だれか、外すのを手伝ってください」

一方。
桜子たちは待ちわびていた。
「あの蘭子とかいう奴、なんかしてるみたいだな」
暇にも程があったので、一度タイムをとって全員がマウンドに集合していた。
「チャック開けて中から怪物が出てくるとか？」
音々が冗談のつもりで言う。
「なんだそれ」
桜子はあきれた口調で一言切捨てる。
「でも、確かに何かを開いてるみたいですよ？」

刹那の言葉に、一同が蘭子の方に目を凝らす。確かに、何かチャックのようなものを下ろしている。部員総がかりで。
「まさか、本当に何か得体の知れないものが中に……」
遊衣が呟く。
「だから、それはないって」
桜子はさらに常識でそれを否定した。
しかし。
蘭子の背中から、不意に翼が飛び出てくる。
「えっ、得体の知れないものがぁっ！」
衝撃的な出来事に遊衣が奇声を上げる。
そんなことにはお構いなく、蘭子の中からはもぞもぞとさらに何かが出てくる。蛇のような皮膚の腕に、悪魔のような角。翼も悪魔じみている。身体全体がその中から出てくると、もう完璧に悪魔か何かのような姿をしていた。ちなみに服は着ておらず、うろこが隠すべき場所を隠している。
「……もう、何がなんだか」
事情が飲み込めず、唖然とする桜子チームだった。

「ら、蘭子さん、その姿は？」
ソフト部員の一人が尋ねる。背中に悪魔の翼、頭には角、身体をいい感じに隠すうろこに、今までとは比べ物にならないぐらいのナイスボディ。加えて黒髪の美少女ときたものだ。たいていの人間の脳容量の限界を超えている。
「私はね、政府の極秘の開発でこんな姿になった哀れな少女……。人としての生を捨て、この姿で永遠に施設の中で生きるしかなかった」
不意になにやらファンタジックなことを話し出す蘭子。
「けれどね、私は春先輩のお父さんに救ってもらったの。引き取ってもらったばかりか、名前と苗字も頂き、この姿を隠して生活する

ためのプロテクターまで作ってくださった……。だから私は一生仕えるんです。春先輩と、その一族の方に！」
殆どの部員は、プロテクターを何故このデザインにした、という疑問をぬぐえないまま話を聞いている。
「けど、春先輩以外にこの姿を見られた以上、私はもうこの学校には通えません」
『！』
あまりにも急な展開に、その場全てのソフト部部員が感嘆符を頭上に浮かべる。
「この試合が終われば、私はこの学校から去ります。もうこの街にもいられません！」
「そんな、蘭子さん！」
「行かないで、蘭子先輩！」
「そうよ、まだそう決めるのは早すぎるわ！」
「そうだそうだ！」
最後の一言はベンチの外側から聞こえる。驚いた一同がその方向を向くと、見事に五木が立ち話を聞いていた。
「こんなナイスキャラを失うなんてもったいない！　この学校に残るべきだ！」
「でも、あなたの友達の人たちにもこの姿を見られたわけですし――」
「そんなもん、コスプレってことにしとけばほぼ大丈夫だって」
大丈夫なのか？　殆ど全員がその疑問を抱く。ってか、敵チームのくせにさりげなく馴染むのをやめて欲しかったりする。
「それに、何のコスプレって訊かれたら答えられませんし」
「そんなもん、個人製作のアニメのキャラクターって言っとけばバレないバレない」
何者だお前。やっぱりその場のほぼ全員がその感想を抱く。
その時、桜子が五木の元に駆け寄ってくる。
「おい五木！　こんなところで何やってんだよ！」

「あ、突然で関係ないけどこの人のこの格好、コスプレだから」
「マジで？　なるほど、だからこんなに奇抜なわけか」
（キャパシティ広いねぇ、キミ）
自分で言い出しておきながら、そんな感想を抱かずにはいられない五木。
「じゃあ、とにかく試合再開だ！　あんたも早く来いよ」
さわやかに言い放ち、立ち去っていく桜子。なんだかいい笑顔だったりする。
それを見て。
「……かっこいい」
呟く蘭子。顔を赤らめて言うものだから、五木は早速食いついてくる。
「おや、蘭子ちゃん、キミ、もしかして桜子に――」
「いっ、いえ、そんなことはないですっ！」
「まあまあ隠さなくてもいいよ。桜子はうちの学校でもかなり人気がある子だからねぇ。刹那、チャオと合わせてプルケリマ一年生三大美少女と呼ばれていたりする」
最後の変な名前は五木のでっちあげだが、桜子、刹那、チャオの三人がプルケリマで人気の美少女であることは間違いないことである。ちなみに音々や遊衣も同じくらい人気があったりする。小夜と五木は「喋らなければ」という条件付きでなら数に入れられることもある。
「あ、でも桜子は刹那とデキてるからだめだよ。狙うなら遊衣たんですね～。あ、私も小夜とデキてるから、だめだぞぉ？」
「誰が誰とデキてるって？」
いつの間にやら五木の背後に回っていた小夜が、後頭部に鋭いツッコミをいれる。この程度のツッコミはいつものことなので、全く動じない五木。
「なんだよ小夜たん、私の子供が欲しいのかい？」
「こども……」

顔を真っ赤にして固まる小夜。
「お、エロモードだね小夜っち」
「誰がエロモードだぁっ！」
素早くエロモードから帰還し、五木につっこむ小夜。その使命感は半端なものではなかった。あるいは侮辱に対する反応か。
「あはは、照れんな照れんな！」
「照れてない！」
「お前ら早く守備につけェッ！」
マウンド上の桜子から怒鳴り声が飛ぶ。さすがの二人も怒鳴られたら守備位置へと戻っていく。
ベンチにソフト部部員全員が思った。
この人たち、いったい何者だ。

やっと試合が再開し、バッターボックスに立つ蘭子。バットを構え、高らかに宣言する。
「打ちます」
ゴリラプロテクターに入っていた時よりもだいぶ絵になっている。奇抜な外見によって、だいぶまともな絵ではないが。
（あの動きにくい巨大スーツの中に入ってのあの動きだ。こいつ――侮れないぞ）
桜子は真剣に考える。翼があるとはいえ、他はうろこだけしか身体にはない。プロテクターの中よりはよほど動きやすいだろう。
桜子は第一球に、内角低目のストレートを選んだ。
蘭子はこれを見逃す。タイミングは速い球を狙っているようだったが、ストレートには手を出さない。
（……私が狙うのは、フォーク。この人が、確実に投げる球）
それなりに論理的ではあるが、蘭子の頭の中は殆ど考え無しだった。その考えなしなりの考えがちょうど上手く重なり、前の打席では打てた。

だが、本人はそんなつもりはない。
（偶然だろうが実力だろうが、またフォークをフェンスの向こうに放り込む……！）
ただ、それだけが蘭子の狙いだった。いや、狙いと言うよりも、目標といった方がいいかもしれない。勝つための必須条件なのだ。蘭子の一発は。それ以外の得点は、もうこの回には見込めない。
第二球。明らかに遅い。スラーブだった。蘭子は全く反応しない。
（フォーク――来い！）
蘭子は視線でそう桜子に訴える。桜子は不適な笑みをこぼし、答えるように頷く。
そして、第三球目。
桜子が放ったボールはフォーク。
（来た！）
蘭子は渾身のスイングでボールに狙いを定める。
――しかし。
そのバットは空しく空を切る。
しかし運のいいことに、内角の球だったのでその巨大な翼に当たり、デットボールとなった。
「痛っぁ！」
声になったのかならないのか微妙な悲鳴を上げる蘭子。
（あれ？　おかしいな……）
蘭子は感じた。明らかに、自分の腕が予想以上に軽くなっていたことを。
そういえば、プロテクターを外してからスイングしたのはこれが最初だ。久しぶりに外に出たというのに、まったく身体を慣らさなかったのだ。
感覚の違いで空振りをして当然だ。
「あ、あっれぇ、久しぶりに外に出たせいかな、あはははは」
ひとまず格好つけて登場したわりに合わない結果をごまかすため、冗談じみた笑いをこぼす。

ソフト部ベンチを見る。
一同がじとっとした目で蘭子を睨んでいた。春までも。
（ごっ、ごめんなさいっ！）
いっそプロテクターから出なきゃ良かった、そう思いながら一塁へ戻っていく蘭子。
その発言を聞いていた桜子は、ふと思い至る。
（久しぶりに出た……あのスーツから？）
それがどういうことを意味するか。しかも、相手は運動部。汗は存分にかくだろう。
（絶対に臭い！）
慌てて桜子は刹那に駆け寄る。
「おい刹那、大丈夫だったか？」
「はい、臭かったです」
「答えになってないぞ、それはっ！」
マスクから覗く刹那の目は、やばい感じに一点を見つめ続けている。予想外のバイオハザード。
（――まあ、ボールは取ってくれるからいいか）
あっさり引き下がる桜子。
後続が運よく内野安打を放ってソフト部は盛り上がるが、そのあとを三振で討ち取られてそれも終わってしまう。
ひとまず攻守が交代する。が、桜子チームの五、六、七番が見事に抑えられ、イニングはあっさりと終了した。

最終回。
ソフト部チームの五番、六番が凡退。最後になるだろうバッター、七番。
桜子の投げるスラーブとストレート、そして惜しげもなく投げ始めたフォークに手も足も出ず、引張り気味のぼてぼてのゴロになってしまう

これも平凡なサードゴロに終わる――はずだった。
「ふっ、見よ！　この試合はこの私の手で終わるのだぁっ！」
変に張り切った五木が暴投。ファースト、チャオの頭を大きく越えていく。
「ドアホ！」
「蛆野郎！」
「能無し！」
順番に桜子、小夜、音々に罵られて落ち込む五木。なんとか音々が捕球に間に合い、ランニングホームランにはならなかった。
ツーアウト、三塁。
バッターは一番に戻って――春。
「――今度こそ、打ちます！」
春はそう宣言する。
（……偶然だけど、また私に回ってきた。ヒットで同点、長打なら次の蘭子で逆転もありえる）
春はしかし、長打を狙う気はまったくなかった。
（私は、私を貫く。確率的に言って、ヒットなら充分ありえる。長打を下手に狙えば、前の打席みたいに討ち取られる）
よって、春はただのヒットを狙う。作戦としては当然の作戦、守備の穴を突くゴロヒットを。
（変に自信過剰になって、私と蘭子はそれを狙ってこなかった――もう、いい加減にしよう。そんなプライド、とっくに崩されてるんだ）
そう。二点のリードを一瞬で先制された時点で、春と蘭子、そしてソフト部のプライドなど欠片もないほどに打ち砕かれていた。
（確実に、打つ）
春はバットを構える。狙い球はスラーブ。自分はスラーブをあまり投げられていないので、初球としては危険の少ないまともな球を投げる方がいい。
第一球。桜子が投げたのは、ストレート。球速は、百五キロ。

（――ッ！）
春はカットし、流し方向のファールに転がす。桜子は平然とした表情でいた。
（次はセオリーなら遅い球。カーブはほぼ無意味だから無いとして、スラーブかフォークのどちらかで攻めてくる。スラーブよりもフォークが完成度は高い。確立は五分五分）
早ければフォーク、遅ければスライダー。
桜子が放ったボールは、早かった。春はフォークと判断し、バットを振る。
しかし、実際はフォークなどではなく、ストレートだった。綺麗に空振りする。電光掲示板を見れば、その球速は百九キロ。初回に出た最高球速を上回る。
（内角寄りの真ん中に、ストレート！）
フォークだと思い込んでなければ打てていた球だ。またしても、桜子の策にやられる。
（次は何だ？　何で来る）
春は考える。しかし、何も想像できなかった。ことごとく確立を否定された今、春には何一つ予測可能なことは無かった。
「――おい、あんた」
桜子が不意に口を開く。
「変な予測はやめろよ。俺は、この打席はストレートしか投げない。真っ直ぐ一本でいく」
何の利も無い桜子の宣言。自分を不利な状況に追い込むだけの発現だ。春は考える。いや、これは動揺作戦かもしれない。ストレート宣言で速い球に意識を持っていき、遅いスラーブで攻めてくる。あるいは、ストレートに見せかけてフォークを投げてくるかもしれない。
「言っとくけど、ここで嘘なんて吐くほど、俺は小さい人間じゃないからな。ただ、ストレートで確実に押さえられる自信があるだけだ」

春はその言葉になおさら動揺する。何の意味があるのか、少しも理解できない。

――しかし。

（この人が、嘘を吐くとは思えない）

それだけは感じ取る。

そして、迷いを振り払ったかのようにバットを構えた。桜子はそれを見て、納得したような、どこか自信に満ち溢れた笑みを零す。

桜子が振りかぶる。片足を上げ、体重を乗せた。そしてスムーズに重心を移動させる。身体が弓のようにしなり、胸も大きく反っている。そして腕が鞭のようにしなり、美しい円運動をしながら、最高のタイミングでボールが放たれる。春はそのストレートに狙いを定め、バットを振った。

――ズバアァンッ！

快音が、フィールドに鳴り響く。

電光掲示板には、百十三キロと表示されていた。

（――まさか、そんな）

ノビも今日一番のノビだった。春はそう感じる。そして、球速も今日一番のもの。紛れもない、決め球としての渾身のストレートだった。

それに、春は振り遅れた。

完璧な敗北だった。

春はバッターボックスに崩れ落ちる。まるで全ての力が抜けたように座り込む。刹那がマスクを外して心配そうに見ていたが、それにも気付かない様子だった。

（負けた……私の野球人生そのものが、全部否定されたんだ――）

春はそう感じる。ここまで来て、一度も桜子の球を打てなかった。最後のストレートは、油断も無い。完全に狙っていた。それでも当てられなかった。

素人ではないにせよ、野球をやっていない人間を相手に、完全に敗北した。

なら、自分は何のために野球をやっていたのだろう？
女子プロ野球選手など、この程度の勝負にも勝てないようでは夢のまた夢だ。
「――おい、あんた」
不意に、春に呼びかける声があった。春は俯いていた顔を上げる。
目の前には、桜子が立っていた。
「悔しいんだろ」
春は頷く。認めるのも腹立たしかったが、嘘を吐くわけにもいかない。それに、一度反応をしてしまったからには無視をするわけにもいかなかった。
「だったら勝てよ。もう二度と、俺たちに負けないぐらい強くなれよ」
桜子はしゃがみこみ、春と視線を合わせる。春は視線を外そうとしたが、できなかった。圧倒的な桜子の雰囲気と、そのはっきりとした顔立ちの凛々しい美しさに、思わず見入ってしまう。
「悔しくていい。一生この苛立ちを抱えたままでもいい。けど、強くなれ。二度と負けないようになれ。勝ち続けろ」
「けど……」
思わず春は反論してしまう。
「私は、ずっと野球をやってきたんです。プロになりたくて、必死に練習してきました。他のいろんなものを投げ捨てて、ずっと野球をやってたんです。けど、それでも先輩たちに負けて……こんなの、ひどいです」
思わず本音を漏らしてしまう春。ただ、桜子ならば自分のこの感情さえも受け入れてくれる気がした。救われる気がした。何もかもの不安を取り除いてくれると思ったのだ。
しかし、桜子は想像よりよほど残酷だった。
「そんなもの、当たり前だ」
たった一言で、春の苦しみを切り捨てた。
「そういう思いをしてる奴がお前だけだって思うなよ。――例えば

そこにいる刹那ってやつは、毎日必死に勉強してるんだ。けどな、ぜんぜん勉強しない俺よりも成績が悪い。その代わり、お前に投げ勝った俺でも刹那を抑えることはできない」

そこまで言って桜子は言葉を区切る。春は桜子と、刹那を続けて眺める。確かに、桜子でも刹那を抑えるのは難しいように思えた。

「お前は、ただ事実が目の前にはっきり示されただけだ。そりゃあ、もちろん悔しいだろうな。けど、お前がもし本当にプロになるならこんな悔しさいくらでも味わう。何度だって、これと同じぐらい、あるいはもっとひどい負け方をすることだってある。――そりゃあ、勝ったほうが得られるものは大きい。経験も、力もつく。勝った奴が強いし、強くなる。でも、負けないと手に入らないものだって少しはあるんだ」

桜子の言葉は、かつて桜子が武術を習った師匠から教えてもらったことだった。説教臭い、壮年の武術家。その男から教わったことの一つ。

「だから、ひどいなんて言うな。これを受け入れ、乗り越えたら、お前はもっと強くなる」

その言葉に、春は心を動かされる。完全に負けた。しかも、その敗北の意義を敵に説かれている。屈辱でもある。

しかし、その内容は本物だった。紛れも無く、桜子自信が本気で信じている言葉のように感じた。

春は様々な思いを胸に秘め、こう言った。

「つまり、この敗北は私の大切な持ち物、ってことですね」

桜子は頷き、さらに言い加える。

「その代わり、かなり重いぞ。気合入れて支えないと、潰されちまう」

「はい、大丈夫です！」

力強く答え、春は立ち上がる。それをしっかりと見据えながら、桜子もゆっくりと立ち上がった。

「それじゃ、頑張れよ」

そう言って、春の頭をくしゃ、と撫でる。凛々しい表情から一変し、優しい笑顔。春は一瞬どきりとする。
そしてその場を立ち去る桜子。ベンチに戻って、片付けを始めるためだろう。刹那も追いかけて戻っていく。フィールドに残っているのは、春だけになった。
そして、小さく呟く。
「かっこいい……」

ソフト部側ベンチから少し離れた場所で春を見守っていた蘭子。あまりにも臭いと悪評だったので、すでにプロテクターの中に入っている。
「ほらね、大丈夫って言ったでしょ？」
その隣には、五木。その表情に、普段の馬鹿っぽさは無い。
「桜子はね、スーパーマン……じゃないや、スーパーガールなんだから」
まあ、スーパーマンでもいいんだろうけど。五木は心の中だけでそう付け加える。
「ひとまず、良かったです。春先輩、すごく真面目だから……自分を追い詰める癖があるんです。本当は私がそれを止めるべきなんでしょうけど、私には、そんな力はないですし」
「そんなことないよ。キミはそばにいるだけで、あの春って人を充分救ってるのさ」
わざとらしくふざけた調子で言う五木。
「それと、キミ。研究所とか何とかって話、嘘でしょ？」
「――ッ！」
その言葉に反応し、素早く五木へ向き直る蘭子。プロテクターを着ているのでかなり怖い。
「私が思うに、人間と『魔性』の混血だと思うんだけど、どうかな」
「……はい、私の母が魔性で、父は普通の人間でした」

「で、アースガルドの外で恋をして、キミが生まれたわけだ」
「はい」
「ううん、やっぱ問題はノルンなのかぁ」
五木の最後の呟きが蘭子には理解できず、つい訝しげに表情を歪める。
「あ、こっちの話だから安心して。私は、キミを捕まえていた研究施設の人とかじゃないよ。そこは、春ちゃんのお父さんがどうにかしてくれてるんだろうから」
「あなたは……一体？」
蘭子は呟く。五木の表情、そして言葉。全て、普段の様子とは違っていた。そして決して一般人の知るはずのない事を口に出した。
何者なのか。坂咲五木という人間は。
「――ただのバカですよ、私」
まるで兵隊の敬礼のような格好をしてそういい残し、五木は去っていく。「おい五木！　片付け手伝え！」という桜子の怒鳴り声に、普段どおりの間抜けな声で答えながら走り去っていく。その後姿を見送りながら、蘭子は思う。
（――プルケリマ、か。女子野球部は無いみたいだけど、大学にも近いし、いいかもしれない）
向こう側のベンチで、桜子の怒鳴り声が響いていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4146g/

Destiny Spiral 外伝集

2010年10月20日06時43分発行